週刊
世界と日本
昭和47年4月10日創刊
発行所 ©㈱内外ニュース
東京都千代田区永田町2−17−17
〒100−0014 電話(03)3580−1264代
FAX(03)3508−1070
E-mail:tokyo@naigainews.jp
URL https://www.naigainews.jp/
発行・編集人
千葉榮爾
月曜日(第1・3)発行
購読料送料とも前納16,500円(消費税込)
郵便振替口座 00190−7−54604

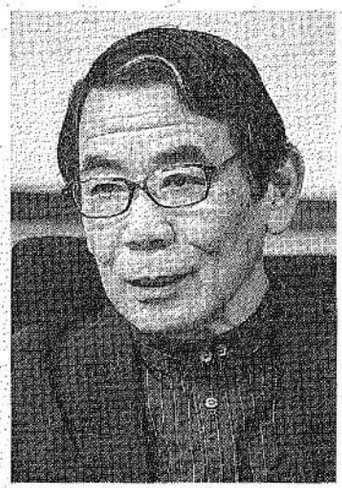
目次

2面 不透明な時代の欧州の「世界戦略」…渡邊啓貴
3面 中国 新疆弾圧は正義の行為…小原凡司
4面 「緑風エッセイ」…笠谷和比古・川島秀一
5面 必須 独自の難民対策の樹立…山田吉彦
6面 緑陰テーマ随想「故郷の思い出」……長島昭久・小川正人・町田忍・山名美和子
7面 マスメディア批判…谷口洋志・本郷一望

無我夢中が最上の幸福の状態

仕事とは対象に自身を委ねること

拓殖大学顧問 渡辺 利夫



コロナ禍、500日を超える外出自粛です。すでに仕事から身を引いた高齢者の多くは、仕事を通じてつながっていた人間関係から放たれ、ただでさえ内向的な生活を余儀なくされているところに、このコロナ禍です。都会のマンションの一室でテレビをみながら無聊の日々を過ごす老夫婦、多くが伴侶を失って孤影悄然とたたずむ高齢者の姿が頭に浮かんできます。コロナ禍で仕事との縁を断たれた孤独の切なさは、私にも十分想像できます。私自身がすでに80歳を超え、親しい旧友、知人の多くがほぼ同年齢だからです。

ほとんど「僥倖」というべきかもしれませんが、私は現在にいたるまで、それ以前とさして変わらない仕事をつづけております。自分を取り巻く社会と時代をテーマに評論を書き、これを新聞や雑誌などに掲載していくという仕事に今も恵まれています。そのための紙面、誌面が用意されていて、毎月必ずやってくる締め切りに合わせあらかじめ想定していたテーマで次々と執筆していくという仕事です。著述家たることを生涯の仕事と考え、そのうえこの仕事を持続させてくれる媒体を用意してもらっていることなど、この歳になった人間からすればやっぱり僥倖というより他ありません。

家族の誰もがいなくなり、猫と2人（？）だけのマンションの一室で、静かに執筆をつづけていると、〝あゝ、仕事が私を救済してくれているのだなあ〟とつくづく感わされます。

仕事とは事に仕えるという意味です。事に仕えるというのは、自己を離れて対象に身を委ねるという意味だと私は受け取っています。ただひたすら事に寄り添い、我を忘れる。小難しいことをいうようですが、没我という言い方があります。仕事に熱中して我を忘れる、自己を離れ自己を没却することが没我です。無我夢中といえばわかりやすいかもしれません。これが人生の中で最も幸福な状態なのであろうと私は想像しています。

コロナ禍の1年半、私は台湾総督府民政長官時代の後藤新平について1冊の著作を執筆しました。この1月に『後藤新平の台湾―人類もまた生物の一つなり』が中央公論新社の選書の1冊として出版されました。

思い立ってこんな仕事を始めたわけではもちろんありません。このテーマに関する原資料を収集して準備に準備を重ねていたところに、新型コロナウイルス感染症の急拡大に襲われて外出自粛をせざるを得なくなったのです。それではと思いを定めて、自宅近くのレンタル・ワンルーム・マンションに籠もり切って、年来のテーマの執筆に取り掛かったという次第です。出来栄えの方はどうだったか、これは読者の判断に任せるより他ありませんが、私がいいたかったことは、この仕事によって私は救済されたのだ、という強い思いです。身内や旧友、親しい多くの高齢者が不快や抑鬱、不安や恐怖に身を縮こまらせていたこの間、私の精神はむしろ強く張り詰めていたように感じられました。

旧ソ連時代のロシアの作家に、アレクサンドル・イサーエヴィチ・ソルジェニーツィンという人がいました。同氏の有名な小説のひとつが『イワン・デニーソヴィチの一日』（木村浩訳、新潮文庫）です。ソルジェニーツィン自身の体験にもとづいて書かれたもののようです。この著作により氏は1970年のノーベル文学賞を授けられました。

この小説は、強制収容所（ラーゲリ）での囚人たちの酷薄の日常を描いてスターリン時代の政治的凄絶を暴いた小説として高い評価を受けました。しかし、それだけではありません。過酷な強制労働を渾身の力をもってまっとうすることにより肉体と精神の崩落を食い止めたロシアの民衆の強靭性への賛歌、これこそがソルジェニーツィンの小説の真髄ではなかったかと私はみています。

主人公のシューホフに与えられた強制労働は、モルタルを使いレンガを積みあげていくという単純で激しい肉体労働です。しかし、ひとたび仕事に取りかかるや、彼の目にはもう自分が担当している外壁作り以外は何も入りません。みごとな手さばきで縦は垂直、横は綺麗に水平な外壁を築いていくのです。この仕事をシューホフは全身全霊でこなし、収容所にありながら伸びやかな生活を送っている、そのさまをソルジェニーツィンは力強い筆致で描いています。

人間にとっての労働の根源的な意味、私はそのことをこの小説の中に読み取っています。仮にシューホフが何の仕事も与えられず、収容所の部屋で粗末な食事を与えられるだけの生活だったならば、彼の精神は崩壊し、精神の崩壊は彼の肉体をもボロボロにしてしまった可能性が大です。仕事が彼を救済したのです。

カール・ヒルティの『幸福論』（草間平作・大和邦太郎訳、岩波文庫）をお読みになった方がおられると思います。この幸福論の中心が仕事です。「人間の本性は働くようにできている」「絶え間のない有益な活動の状態こそが、この地上で許される最高の幸福な状態である」とヒルティはいっています。この言葉はまぎれもなく真実であろうと私には思われるのです。

仕事に没頭するということは、自分以外の何者かに向かって努力するということです。

仕事とは、いま自分の目の前にある対象に向けて自分を投げ出すことです。そこには過去もなければ未来もありません。ヒルティの仕事への没頭とは、要するに無我夢中の状態のことなのでしょうね。無我夢中とは、対象に心を奪われて自分の存在がみえなくなっているような状態です。これほど幸福な状態が他にあるとは思えません。

《わたなべ・としお》 1939年6月甲府市生まれ。慶応義塾大学、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学総長を経て現職。オイスカ会長。外務大臣表彰。正論大賞。著書は『成長のアジア 停滞のアジア』（吉野作造賞）、『開発経済学』（大平正芳記念賞）、『西太平洋の時代』（アジア太平洋賞大賞）、『神経症の時代』（開高健賞正賞）、『台湾を築いた明治の日本人』『放哉と山頭火 死を生きる』など多数。